

## M.ソーヴァン著『画趣に富んだセーヌ川紀行～パリから海に至る』

Picturesque tour of the Seine, from Paris to the sea: with particulars historical and descriptive by M.Sauvan ; illustrated with twenty-four highly finished and coloured engravings, from drawings by A. Pugin and J. Gendall. <K382.35-S>

図書館司書一課 佐藤 友治

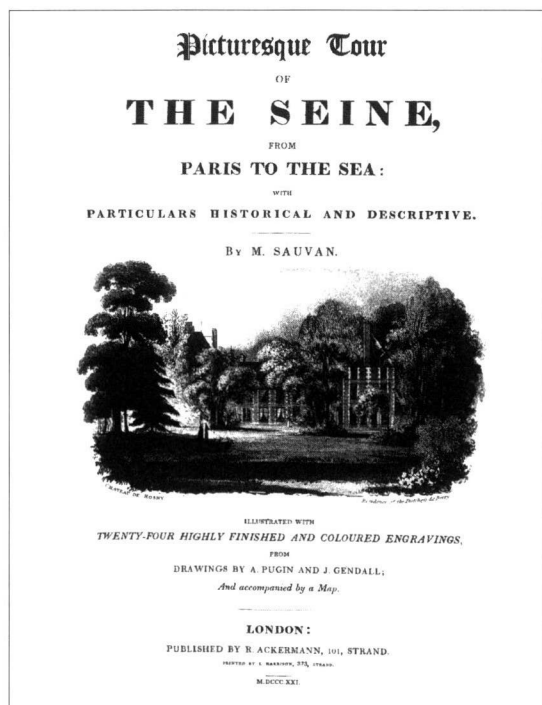
本書は、セーヌ川流域の都市や観光地を紹介した旅行記で、1821年にロンドンのアッカーマン社から出版された。パリの中心、ルーヴル、ノートル・ダムを起点とし、ムーラン、ルーアンを経て英仏海峡に面する港町ル・アーヴルまでの各地をアクアチント彩色銅版画による風景画24枚とともに紹介している。大きさは縦約34.5cm、横約29cm、厚さ約3cmの重厚な作りの本で、装丁は緑の革張り、表紙、裏表紙は金の飾り罫で縁取られている。

セーヌ川はパリ盆地を貫流する川で、全長約776km、源流はブルゴーニュのディジョン近く

のラングル高原に発し、蛇行しつつ英仏海峡に至っている。パリは全長のほぼ中間地点にあたる。セーヌ川は古来フランスの動脈と称せられ、豊富な水量を誇ってきた。流域には首都パリをはじめとして、主要な工業都市、港町や別荘地が点在し、また英仏海峡に注いでいるため外交の拠点としても重要な役割を果たしてきた。セーヌ川流域はほとんど自然美と芸術美に飾られた魅力的な景観を有し、沿岸地域に豊潤、多様性、美観的特色を呈している。

本書でとりあげられているパリから海までのセーヌ川流域にはノルマンディー地方も含まれている。ノルマンディーは、北方民族による建国で一時は、英国をも支配下に治め、両国の歴史は相互に深く関わりあっていた。その後のノルマンディー・英国連合と、フランス王国との戦いは両国の繁栄に大きな影響をおよぼすことになった。

解説文を担当したM.ソーヴァンについては、残念ながら手がかりがなく不詳であるが、彼の記述した序文によれば、ノルマンディーには英国の芸術家や著述家たちが多数存在し、セーヌ川流域に関する書物を著していたが、古代の建築に言及しているものはあっても、画趣に富んだ美しさに言及しているものはほとんどなかった。そのため本書の刊行は非常に歓迎された。読者が家で読んで楽しみ、知識を得るだけでなく、実際に現地に赴こうという人たちの役に立つように、生き生きとした描写を心がけ、興味をひく景観を選び、記述も歴史的なことも含め詳細に行った。掲載されている挿図は1820年夏に現地を検分し、それに



表題紙「ペリー公爵夫人の館」

基づいて描かれているので、精密かつ正確で格好の旅行案内書になっていた。

表題紙のヴィネット（輪郭をぼかした絵画）は、ロニー城。高名なシュルリー家の先祖伝来の城で、本書の刊行当時はベリー公爵夫人の館となっていた。

目次によると紹介されている都市や観光地は65ヶ所にのぼる。挿図は、ル・ルーヴル（口絵）、ノートル・ダム、サン・ドニ、サン・ジェルマン、ムーラン、レ・ザンドリー（ガイヤール城跡）、ラルシェ橋、ルーアン、ジュミエージュ、オンフルール、ル・アーヴル、など風光明媚なものが選ばれ、パノラマ的な構図で描かれている。パリから河口までのセヌ川の地図も掲載されている。微妙な粒子の多層効果によるアクアチント技法ならではの深い陰影表現が見受けられ、見事な出来映えに仕上げられている。その土地の著名な建造物や自然を背景に、働く人々、舟遊びをする人々、魚釣りをしている子供たちなどが生き生きと描かれ、当時の人々の暮らしや風俗を知る資料としても第一級である。

本書には購読予約者名簿が掲載されており、約300名の名前が記されている。アクアチント彩色銅版画は、その技法上当時は300部ほどの刷りが限度とされ、この予約者名簿の数からもそれが裏付けられる。名簿には英国国王、ルイ18世、ヨーク公、ベリー公爵夫人といった当時の名だたる名士たちが見られる。

表題紙には画家としてA.PuginとJ.Gendallが併記されている。21枚には“J.Gendall del.”と記載されている（del.は、delineavitの略で、誰々描くの意）。口絵の「ル・ルーヴル」には“A.Pugin del.”と、口絵のあとの2枚（ノートル・ダム）にはPuginのスケッチを元にGendallが描いたと表示されている。Puginの名が表記されているのはこの3点のみである。

フランスのノルマンディーで1762年に生まれたオーギュステス・シャルル・ピュジャン（Augustus Charles Pugin, 1762-1832）は建築家、イラストレーター、水彩画家、製図工、デザイナーそれに教師と広範囲な職業を持っていた。

おそらく芸術に関わる高貴な家柄であったと思われる。フランス革命の最中にイギリスに移住し、ロイヤル・アカデミーの絵画科に入学した。その後ピクチャレスクの別荘建築で有名なジョン・ナッシュ（John Nash, 1752-1835）のもとで製図工として17年働いた。出版社や芸術分野の著述家たちと親交を結び、出版社兼販売社ルドルフ・アッカーマンとも親交があり、イラストを描いて最も成功した“Microcosm of London”ほか何冊かの本を出版した。グラフィックアートにおいて彼は他に例を見ない透明さと精密さを持った建築画を作り出した。彼はまた水彩画にも優れており、光の効果を重要視した。著書としては歴史的建造物を詳細にわたって描いた『ゴシック建築の作例集』（“Specimens of Gothic Architecture”）が名著として知られている。建築作品として残した業績は多くなく、ロンドンのリージェンツ・パークの「ジオラマ」と呼ばれた光学的な見世物を手がけたほか、別荘をいくつか設計した程度であった。

J.ジェンダル（John Gendall, 1790-1865）はアッカーマン社でアクアチント版画の製図工として働き、画家としても活躍していた。1817年から1819年の間に、アクアチントによるロンドンの風景面のシリーズを出版した。1819年から1827年にかけて、「カントリーハウス」の絵を、『芸術の宝庫』（“Repository of Arts”）に寄稿した。それらの多くは“Views of Country Seats”（1830）に収録されている。1821年から1824年にはエクセター美術展（Exeter Art Exhibition）に作品を出品した。エクセターの文化的全盛期であった1830年代には、美術の権威、あるいは素描の大家と認められるに至った。1845年から1847年のデヴォンとエクスターの学会の展覧会における成功によって定期的にロイヤル・アカデミーにデヴォン川の情景を寄稿するようになった。色彩豊かなグワッシュによるスケッチもこの時期から見られる。彼はまたエクセターのロイヤル・アルバート・メモリアル・ミュージアムの主要コレクションの名誉主任であったが、美術館の完成を待たずに亡くなった。